様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０８５４９

研究課題名（和文）高齢者終末期ケアと事前指示の実態に関する縦断的検討

研究課題名（英文）Cohort Study of Advance Directives and End of Life Care

研究代表者
和田　泰三（Wada, Taizo）

京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携准教授

研究者番号：９０３７８６４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：高齢者総合機能評価時に人工的水分・栄養方法の利点・難点について具体的に記した説明書を配布し、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）の推進をはかるとともに、希望者には事前指示書の書式を配付した。有料老人ホームにおいて、ACP後に事前指示書を作成して提出した入居者は77%であり、人生最終段階の医療ケアについて価値観が明確であるものが多いことがあきらかとなった。農村部在住高齢者（75歳以上）においてもあらかじめ担当医の参考となるように人工的水分・栄養方法の希望をつたえておきたいと回答したものは55.3%にのぼり、ACPに積極的であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人生最終段階における人工的水分・栄養方法の導入について、本人にとっての最善（Best Interest）を理解をするためには意思決定能力喪失以前の価値観共有が必要である。本研究は、生活機能が比較的保たれた高齢者を対象に人工的水分・栄養方法を含んだACPを総合機能評価時に開始することが可能であり、農村部在住高齢者の半数以上、有料老人ホーム在住者の3／4以上のものがACPに積極的であることを示した点で意義がある。本邦では死について考えたり、議論したりする文化的背景が乏しいが、人工的水分・栄養方法などの医療面に関して積極的に利点・難点をふくめて情報発信することもACP推進に重要と考えられる。

研究成果の概要（英文）：To promote advance care planning, leaflet that specifically describes the advantage and disadvantages of artificial nutritional hydration methods were distributed to all participants at the time of annual comprehensive geriatric assessment. Participants who were willing to have documents of advance directives could receive it. In a nursing home, 77% of the resident have completed the document of advance directives after advance care planning. In rural area, 55.3% of the participants preferred to inform their value for applying artificial nutritional hydration to their attending physician in case they would not take food nor water orally. It became clear that many of the elderly wanted to express their intention to care at the final stage of their life to start advance care planning.

研究分野：老年医学

キーワード：事前指示　終末期ケア　アドバンス・ケア・プランニング　人工的水分・栄養方法　胃瘻　認知症　総合機能評価　地域在住高齢者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2025 年には団塊の世代のすべてが後期高齢者となって総死亡数は年間約 159 万人と総出生数の２倍に達し、その９０％が高齢者の死亡となることが予測されている。しかし、日本は Quality of Death index ランキング（The Economist Intelligence Unit,2010）において 40 カ国中 22 位と低迷し、高齢者の終末期ケアの質の向上は急務である。悪性腫瘍の終末期ケアについては緩和ケア学のひろまりによって一定の質の向上を達成した。一方で、非悪性腫瘍や神経疾患の終末期ケアについては、文化的背景によりその実態は多様といえる。また、近年アルツハイマー型認知症を代表とする変性性認知症患者は増加しており、地域社会や家族にとって大きな介護負担となっている。しかし、経口摂取ができないほどに症状が進行したときは、本人の意志が確認できないまま栄養方法や医療ケアの方針が決定されているのが現状である。本邦において変性性認知症末期の経管栄養の是非など倫理的問題に対する国民的コンセンサスはまだな<、患者本人の意志が不明のまま介護者や医療者が個々に判断しているのが現状でありその心理的負担は大きい。欧米においては将来の意思決定能力に備えてケアの方針を話しあい、事前指示書等を作成するまでの価値共有のプロセスの重要性を強調したアドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning; ACP）のガイドラインが存在し、無作為比較試験において遺族のストレス軽減効果等の有用性が報告されている（Detering KM. BMJ. 2010）生命予後が 1 年未満と予想される高齢者には、総合機能評価のなかで終末期ケアに関する説明を開始することが推奨されているが、(LakahaniN,BMJ,2011)患者の自律性を重視する欧米文化で発達してきた事前指示や ACP が、専門家の判断にゆだねつつ阿吽の呼吸で終末期ケアの方針が決定されてきた日本の医療現場においても浸透するかどうかについては不明点が多い。

２．研究の目的

平成２４－２６年度の基盤研究（Ｃ）「高齢者終末期ケアに関する事前指示の縦断的検討ー総合機能評価の視点からー」（代表・和田泰三）では有料老人ホームにおいて独自の事前指示書(終末期医療にむけての要望書)を作成し、これを作成している入居高齢者は 2014 年には 52.6%に達し、事前指示書作成者は有意に認知機能や活動能力が高いことを報告した。高知県土佐町在住者を対象とした調査（N=587）では、終末期の栄養方法について、胃瘻、経鼻経管栄養、末梢点滴、中心静脈栄養、経口摂取のみ、それぞれイラストをもちいて説明したところ、経口摂取のみを希望するものが 50.3%、次いで末梢点滴 42.5%、胃瘻、経鼻経管栄養、中心静脈栄養は 4.3-5.1%であり、少数ではあるが終末期にも人工的栄養方法を望むものが存在することがあきらかとなった。(WadaT.J Am Geriatr Soc.2014) 終末期ケアにおける患者本人の価値共有達成度は多様であり、意志決定プロセスのあり方が患者のみならず、家族、介護者、医療者の満足感に影響する。人類がもつ想像するちから、共感能力はあらゆる「ケア」の根幹である。(佐藤・和田ら編「生存基盤指数-人間開発指数を超えて-」2012) 価値共有のプロセスが事前指示書作成の有無にかかわらず終末期ケアにはきわめて重要である。本研究の目的は、ACP の視点から地域住民を対象として死や終末期ケアに関する教育・広報活動を行うとともに高齢者総合機能評価を継続し、　日常生活動作、抑うつ、口腔機能とともに終末期ケアに関する意志決定プロセスの実態を明らかにすることである。

３．研究の方法

（1）　対象地域、対象人数

① 有料老人ホーム「ライフ・イン京都」に在住する 65 歳以上の高齢者 270 人(質問紙による評価:250 人、検診による評価:90 人)

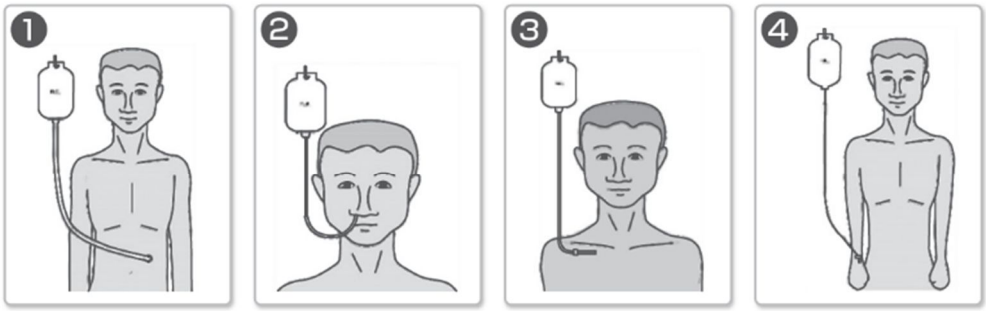
② 高知県土佐町(高齢化率 40.6%)在住する 65 歳以上の高齢者 1700 人(質問紙による評価:1600 人、検診による評価:320 人)

（2）事前指示書に関する住民勉強会・教育・広報活動

上記対象者に人生最終段階でも経口摂取を継続するための工夫と、人工的水分・栄養方法の利点・難点についての説明書（図を含む）を配付する。希望者には医療代理人指定などの情報を記載することが可能な事前指示書を提示し、総合機能評価検診時に個別相談を行なって、意思決定能力を喪失したときに備えた価値共有の話しあい、ACP を実践する。

人工的な水分・栄養方法について

医学的理由で希望どおりに出来ない場合がありますが、人工的な水分・栄養補給方法には下記①～④がありますが、それぞれ利点・難点があります。



❶胃　瘻……内視鏡手術で胃に穴をあけて栄養剤を注入
❷経鼻経管栄養……鼻から胃にチューブを入れて栄養剤を注入
❸胸部中心静脈からの高カロリー輸液……小手術を要す
❹点　滴……水分と少量の栄養のみ

（図）

（3）質問紙による総合機能評価
下記項目からなる質問紙を町役場より各家庭に郵送して評価し、回収を町役場保健師が行う。有料老人ホームにおいてはホーム職員により質問紙の配布・回収をおこなう。
① 事前指示作成の有無と保管場所、親族、かかりつけ医への開示状況の確認
② 基本的ADL(歩行・階段・食事・整容・トイレ動作・入浴動作・着衣動作)(7 項目21 点満点)
③ 老研式活動能力指標(13 項目13 点満点)
④ ライフスタイル(喫煙・飲酒・運動習慣・昼寝習慣) 家族構成
⑤ 疾患の既往(糖尿病、心臓病、癌、脳卒中、骨関節疾患)と内服状況
⑥ EAT-10による嚥下機能評価
⑦ Visual Analogue Scale を用いたQOL 評価、
⑧ Geriatric Depression Scale-15(GDS-15)による抑うつ評価

（4）総合機能評価（CGA）検診
① 事前指示書作成希望者対象の病態に応じた個別相談。
② 身長・体重・血圧測定・腹囲測定
③ 嚥下機能検査（EAT-10によるスクリーニング・反復唾液嚥下テスト・歯科診察）
④ 認知機能検査(MMSE、Kohs 立方体)
⑤ 神経行動機能検査(Up&Go テスト、ボタンテスト、functional reach)

４．研究成果

（1）2017 年 10 月ライフ・イン京都において総合機能評価問診に回答した 198 名　（平均年齢 86.9 才　男性 43　女性 155）に対して経管栄養などの人工的水分・栄養方法の利点・難点について説明書を配布し、事前指示書作成者数を 2 年前と比較した。特に、胃瘻についてはイラストで説明するとともに内視鏡手術を実施することが必要であることを示し、利点として
① 腸管から栄養を吸収するため、栄養方法として優れている。
② 胸部中心静脈栄養にくらべて感染の危険性がすくない。
③ 半固形栄養を使用すれば、介護者は 5～10 分程度で注入をおえることができる。流動食では 1～2 時間かけて滴下する。
④ 臓器機能が正常であれば、数年単位の延命が可能となる。
ことをあげた。難点として
① 栄養剤の逆流や慢性誤嚥による誤嚥性肺炎の危険性がある。
② 最初は胃カメラで小手術を行い、胃から腹部に瘻孔を作成する必要がある。約 6 ヶ月毎に胃瘻ボタン交換処置が必要。
③ ベッド上生活が中心の要介護状態で意思疎通不可能となっても数年間の延命が可能なことが多く、介護者の確保が困難な場合がある。
ことを明記し、説明会を開いた。経鼻経管栄養、中心静脈栄養、末梢点滴についても同様に詳細な説明をおこなった。事前指示書作成者は回答者の 77.2%であり、2015 年の 60.3%より増加し

た。作成者は作成していないものに比べて有意に年齢が高かったが、ADL,老研式活動能力指標、転倒スコア、GDS-15,主観的健康感に有意な差はなかった。総合機能評価時に人工的水分・栄養方法の利点・難点について説明書を配布し ACP 開始を試みた結果、事前指示書を作成するものが増加した。

（2）2019 年 5 月高知県土佐町在住の 75 才以上高齢者のうち、総合機能評価問診に回答した 466 名（男 192 女 274　平均年齢　82.1（SD　5.5））であった。あらかじめ担当医の参考となるように ANH の希望をつたえておきたいと回答した高齢者を ACP 積極群とし、基本的 ADL,老研式活動能力指標、転倒スコア（FRI-5）摂食嚥下障害スクリーニング（EAT-10）， GDS-15， VAS で評価した主観的健康感について、ACP 非積極群と比較した。その結果 ACP 積極群は 204 名（55. 3%）であった。ACP 積極群は ACP 非積極群と比較して年齢(P=0.03)、EAT-10(P<0.0001)、FRI(P=0.002)、GDS-15（P=0.03）が有意に高く、主観的健康感（P=0.04）が有意に低かった。一方、両群間に基本的 ADL,老研式活動能力指標に有意差は認めなかった。人生最終段階の ANH 法についてあらかじめ担当医に希望を伝えておきたいと考えている高齢者は地域在住高齢者の半数以上にのぼった。

（3）抑うつが生命予後と関連するか否か 2004 年、高知県土佐町に居住する 65 才以上の高齢者(N=1444 平均年齢 75.0±6.9, range65-103)を対象とし、Geriatric Depression Scale-15(GDS)により抑うつを評価すると同時に、基本的 ADL，老研式活動能力指標、Visual Analogue Scale による主観的健康感を評価した。GDS９点以上の抑うつあり群と GDS８点以下の抑うつなし群の 2 群にわけて 11 年間の Kaplan-Meir 分析を行うと同時に、Cox 比例ハザードモデルによって、ベースラインでの抑うつ、ADL 低下、主観的健康感低下が年齢・性で調整しても生命予後と関連するか否かを検討した。その結果 11 年間に 30.1%の高齢者が死亡した。抑うつあり群２９５名（20.4%;男 122 女 173）は抑うつなし群 1119 名（男 470、女 679）にくらべて生存時間の有意な低下（Log Rank test P<0.001）を認めたが、この傾向は男性においてフォローアップ期間早期からより明確に認められた。(男 p=0.006、女 p=0.03）また、抑うつは年齢・性調整後のハザード比 1.3 （95%CI:1.02-1.57）の有意な生命予後予測因子であった。基本的 ADL 低下、老研式活動能力指標非自立、主観的健康感低下の各因子も生命予後に対して有意な関連を認めた。農村部在住高齢者において、抑うつは男性においてより強く生命予後と関連することが明らかとなった。

（4）総合機能評価問診の有効回答を得た 209 名（平均年齢 86.1 歳（SD7.0)、女性 79.9%）を対象として昼寝をするか否かを問い、昼寝をしない Non-Napper 群、30 分以下の Short-Napper 群、31 分以上の Napper 群に分類し、基本的 ADL、老研式活動能力指標、GDS-15、転倒スコア、主観的健康感、事前指示書作成との関連を検討した。また、検診受診者については、MMSE・歩行速度、握力との関連も検討した。ANOVA で P<0.05 の有意差を認めた場合、Bonferroni 法を用いて多重比較をおこなった。その結果、約半数に昼寝をする習慣があった。Non-Napper 群 108 名(51.7%),Short-Napper 群 49 名（23.4%），Napper 群 52 名（24.9%）の各群間に年齢・GDS・転倒スコア・事前指示書作成の有無について有意差を認めなかったが、基本的 ADL、老研式活動能力指標、主観的健康感は Napper 群が他群より有意に低かった。検診受診者 59 名の検討では、MMSE、握力に有意差をみとめなかったが、歩行速度は Napper 群が他群より有意に低かった。30 分を超える Napper 群は ADL 低下、主観的健康感低下、歩行速度低下と関連することがあきらかとなった。

（5）本研究のインパクト
自律性を重視する欧米文化で発達してきた事前指示や ACP が、専門家の判断にゆだねつつ阿吽の呼吸で終末期ケアの方針が決定されてきた日本の医療現場においても浸透するか？本研究教育歴の高い高齢者が多い有料老人ホームにおいて、77%もの入居者が事前指示書を作成しているほか、農村部在住の高齢者を対象とした検討にいおいても人生最終段階の人工的水分栄養法についてあらかじめ担当医に希望を伝えておきたいと考えている高齢者は半数以上にのぼった。国内において、一般市民を対象とした終末期ケアについての具体的な教育機会は極めて乏しい。生活機能が維持されている比較的健康な高齢者を対象として医療者側が積極的に情報発信することで、ACP に積極的な高齢者が増加することがあきらかとなった。

（6）今後の展望
地域在住者や有料老人ホーム入居者に対し、人生最終段階における人工的水分・栄養方法についての価値観共有を含む ACP を推進することで Quality of Death (QOD)向上が図れるか否かは未だあきらかでない。ACP 開始のタイミングと頻度、ACP 開始後の意思決定のありかたや死亡者の追跡とともに、終末期ケアの実態について医療機関や施設職員の協力を得て検証を継続していくことが必要である。

（引用文献）

Detering K,Hancock A, Reade M, Silvester W. The Impact of Advance Care Planning on End of Life Care in Elderly Patients: Randomised Controlled Trial. BMJ. 2010 Mar 23;340:c1345.doi: 10.1136/bmj.c1345.

Lakhani M. Consider advanced care planning in functional assessment of older people. BMJ. 2011 Sep 20;343

Wada T, Imai H, Fukutomi E, Chen WL, Okumiya K, Ishimoto Y, Kimura Y, Sakamoto R, Fujisawa M, Matsubayashi K. Preferred feeding methods for dysphagia due to end-stage dementia in community-dwelling elderly people in Japan. J Am Geriatr Soc. 2014 Sep;62(9):1810-1

和田泰三　第5章　人間圏総合指数とその構成要素　講座生存基盤論　第5巻「生存基盤指数-人間開発指数を超えて-」（佐藤孝宏・和田泰三・杉原薫・峰陽一編）pp107-136　京都大学学術出版会　　2012年3月

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　8件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Iwasaki Masanori、Kimura Yumi、Ogawa Hiroshi、Yamaga Takayuki、Ansai Toshihiro、Wada Taizo、Sakamoto Ryota、Ishimoto Yasuko、Fujisawa Michiko、Okumiya Kiyohito、Miyazaki Hideo、Matsubayashi Kozo	４．巻 54
２．論文標題 Periodontitis, periodontal inflammation, and mild cognitive impairment: A 5‐year cohort study	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Journal of Periodontal Research	６．最初と最後の頁 233～240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jre.12623	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hirosaki Mayumi、Okumiya Kiyohito、Wada Taizo、Ishine Masayuki、Sakamoto Ryota、Ishimoto Yasuko、Kasahara Yoriko、Kimura Yumi、Fukutomi Eriko、Chen Wen Ling、Nakatsuka Masahiro、Fujisawa Michiko、Otsuka Kuniaki、Matsubayashi Kozo	４．巻 29
２．論文標題 Self-rated health is associated with subsequent functional decline among older adults in Japan	５．発行年 2017年
３．雑誌名 International Psychogeriatrics	６．最初と最後の頁 1475～1483
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1041610217000692	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sakamoto Ryota、Okumiya Kiyohito、Norboo Tsering、Tsering Norboo、Yamaguchi Takayoshi、Nose Mitsuhiro、Takeda Shinya、Tsukihara Toshihiro、Ishikawa Motonao、Nakajima Shun、Wada Taizo、Fujisawa Michiko、Imai Hissei、Ishimoto Yasuko、Kimura Yumi、Fukutomi Eriko、Chen Wenling、Otsuka Kuniaki、Matsubayashi Kozo	４．巻 249
２．論文標題 Sleep quality among elderly high-altitude dwellers in Ladakh	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Psychiatry Research	６．最初と最後の頁 51～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.psychres.2016.12.043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takahiro Sato, Mario Ivan Lopez, Taizo Wada, Shiro Sato, Makoto Nishi, Kazuo Watanabe	４．巻 6
２．論文標題 Humanosphere Potentiality Index Appraising Existing Indicators from a Long-term Perspective	５．発行年 2016年
３．雑誌名 The International Journal of Social Quality	６．最初と最後の頁 32-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3167/IJSQ.2016.060103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Iwasaki M, Kimura Y, Ogawa H, Wada T, Sakamoto R, Ishimoto Y, Fujisawa M, Okumiya K, Ansai T, Miyazaki H, Matsubayashi K.	4．巻 44 (1)
2．論文標題 The association between dentition status and sarcopenia in Japanese adults aged >=75 years.	5．発行年 2017年
3．雑誌名 J Oral Rehabil	6．最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/joor.12460	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Chang NY, Kimura Y, Ishimoto Y, Wada T, Fukutomi E, Chen WL, Sakamoto R, Fujisawa M, Okumiya K, Matsubayashi K.	4．巻 64 (8)
2．論文標題 Relationship Between Oral Dysfunction, Physical Disability, and Depressive Mood in Community-Dwelling Elderly Adults in Japan.	5．発行年 2016年
3．雑誌名 J Am Geriatr Soc.	6．最初と最後の頁 1734-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jgs.14211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Imai H, Okumiya K, Fukutomi E, Wada T, Ishimoto Y, Kimura Y, Chen WL, Tanaka M, Sakamoto R, Fujisawa M, Matsubayashi K.	4．巻 227(1)
2．論文標題 Association between risk perception, subjective knowledge, and depression in community-dwelling elderly people in Japan.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Psychiatry Res	6．最初と最後の頁 27-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.psychres.2015.03.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Imai H, Furukawa TA, Okumiya K, Wada T, Fukutomi E, Sakamoto R, Fujisawa M, Ishimoto Y, Kimura Y, Chen WL, Tanaka M, Matsubayashi K.	4．巻 229(1-2)
2．論文標題 Postcard intervention for depression in community-dwelling older adults: A randomised controlled trial.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Psychiatry Res.	6．最初と最後の頁 545-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.psychres.2015.05.054	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Chen W, Okumiya K, Wada T, Sakamoto R, Imai H, Ishimoto Y, Kimura Y, Fukutomi E, Fujisawa M, Shih HI, Chang CM, Matsubayashi K.	4．巻 27(11)
2．論文標題 Social cohesion and health in old age: a study in southern Taiwan.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Int Psychogeriatr.	6．最初と最後の頁 1903-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1041610214002907	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Sakamoto R, Okumiya K, Ishine M, Wada T, Fujisawa M, Imai H, Ishimoto Y, Kimura Y, Fukutomi E, Chen W, Sasiwongsaroj K, Kato E, Otsuka K, Matsubayashi K.	4．巻 16(2)
2．論文標題 Predictors of difficulty in carrying out basic activities of daily living among the old-old: A 2-year community-based cohort study.	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Geriatr Gerontol Int.	6．最初と最後の頁 214-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.12462	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Okumiya K, Fujisawa M, Sakamoto R, Wada T, Chen WL, Imai H, Ishimoto Y, Kimura Y, Fukutomi E, Sasiwongsaroj K, Kato E, Tanaka M, Hirosaki M, Kasahara Y, Nakatsuka M, Nose M, Ishine M, Yamamoto N, Otsuka K, Matsubayashi K.	4．巻 63(2)
2．論文標題 Effect of early diagnosis and lifestyle modification on depressive symptoms in community-dwelling elderly adults with glucose intolerance: 5-year longitudinal study.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 J Am Geriatr Soc.	6．最初と最後の頁 393-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jgs.13269	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Sasiwongsaroj K, Wada T, Okumiya K, Imai H, Ishimoto Y, Sakamoto R, Fujisawa M, Kimura Y, Chen WL, Fukutomi E, Matsubayashi K.	4．巻 15(11)
2．論文標題 Buddhist social networks and health in old age: A study in central Thailand.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Geriatr Gerontol Int.	6．最初と最後の頁 1210-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.12421	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kimura Yumi、Iwasaki Masanori、Ishimoto Yasuko、Sasiwongsaroj Kwanchit、Sakamoto Ryota、Wada Taizo、Fujisawa Michiko、Okumiya Kiyohito、Miyazaki Hideo、Matsubayashi Kozo	4．巻 19
2．論文標題 Association between anorexia and poor chewing ability among community‐dwelling older adults in Japan	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6．最初と最後の頁 1290～1292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.13792	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Senoo Soichiro、Iwasaki Masanori、Kimura Yumi、Kakuta Satoko、Masaki Chihiro、Wada Taizo、Sakamoto Ryota、Ishimoto Yasuko、Fujisawa Michiko、Okumiya Kiyohito、Ansai Toshihiro、Matsubayashi Kozo、Hosokawa Ryuji	4．巻 47
2．論文標題 Combined effect of poor appetite and low masticatory function on sarcopenia in community‐dwelling Japanese adults aged???75 years: A 3‐year cohort study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Oral Rehabilitation	6．最初と最後の頁 643～650
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/joor.12949	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 和田泰三
2．発表標題 総合機能評価時におけるアドバンス・ケア・プランニングの試み
3．学会等名 第60回日本老年医学会学術集会
4．発表年 2018年

1．発表者名 和田泰三、石根昌幸、石本恭子、木村友美、山中学、藤澤道子、中塚晶博、奥宮清人、松林公蔵、坂本龍太
2．発表標題 農村部在住高齢者の抑うつと生命予後　―11年間の検討――
3．学会等名 第59回日本老年医学会学術集会
4．発表年 2017年

１．発表者名 和田泰三
２．発表標題 有料老人ホーム在住高齢者の孤独感とその関連因子
３．学会等名 第58回日本老年医学会学術集会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Wada T
２．発表標題 How to appreciate the patients preference？----From the view point of advance care planning---
３．学会等名 Korea Geriatric Society. KGS Korea-Japan Joint Symposium.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 和田泰三　他9名
２．発表標題 Visual Analogue Scaleで測定したQOLとSF-8 の関連
３．学会等名 第57回日本老年医学会学術集会
４．発表年 2015年

１．発表者名 和田泰三　他9名
２．発表標題 多職種連携により在宅看取りが可能であった独居高齢がん患者の一例
３．学会等名 第26回日本老年医学会近畿地方会
４．発表年 2015年

１．発表者名 和田泰三　他9名
２．発表標題 有料老人ホーム入居者の昼寝習慣と総合機能評価の関連
３．学会等名 第61回　日本老年医学会　学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 和田泰三
２．発表標題 非がん疾患の在宅医療　診療ガイドラインをどう活用すべきか　「高齢者在宅医療・介護サービスガイドライン2019」をどのように活用できるか?
３．学会等名 第一回　日本在宅医療連合学会大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 和田泰三
２．発表標題 「高齢者在宅医療・介護サービスガイドライン2019年版」の臨床応用に向けて　担がん患者に対する在宅医療・介護サービスのエビデンスと臨床応用
３．学会等名 第61回　日本老年医学会　学術集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 和田泰三
２．発表標題 地域包括ケアにおけるアドバンス・ケア・プランニングの試み―人工的水分・栄養補給を中心として―
３．学会等名 第6回　釧路生命倫理フォーラム
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 日本老年医学会　日本在宅医学会　国立長寿医療研究センター	4．発行年 2019年
2．出版社 ライフ・サイエンス	5．総ページ数 138
3．書名 高齢者在宅医療・介護サービスガイドライン2019	

1．著者名 和田泰三　　（編　近藤祥司）	4．発行年 2015年
2．出版社 メディカルサイエンス・インターナショナル	5．総ページ数 408　　（p199-217）
3．書名 第7章　ヒトの寿命　「老化生物学　老いと寿命のメカニズム」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松林　公蔵 (Matsubayashi Kozo) (70190494)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・名誉教授 (14301)	
連携研究者	石本　恭子 (Ishimoto Yasuko) (50634945)	川崎医療福祉大学・医療技術学部・准教授 (35309)	
連携研究者	奥宮　清人 (Okumiya Kiyohito) (20253346)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携教授 (14301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	坂本　龍太 (Sakamoto Ryota) (10510597)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授 (14301)	
連携研究者	藤澤　道子 (Fujisawa Michiko) (00456782)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携准教授 (14301)	